Tsukuba Psychological Research
1996, **18**, 129-133

特性的および類型的観点からみた信頼感の発達

筑波大学心理学系　杉原　一昭

筑波大学大学院(博)心理学研究科　天貝由美子

A study on development of trust from the point of its traits and types

Kazuaki Sugihara *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*
Yumiko Amagai *(Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*

This study examined change of trust from junior high school students to graduates from two points of view: traits and types of trust. The trust scale, which consists of three dimensions ("trust for self","trust for others" and "distrust"), was administered to 1509 subjects. The results were as follows: (a) A school level by sex mixed-ANOVA showed main effects of school level on all three dimensions of trust. "Trust for self" and "trust for others" were significantly higher in undergraduate and graduate students than in junior high school and high school students; "distrust" was the highest in high school students. (b) Chi-square analysis assessed the development of four types of trust the which were made by combining the high or low trust score and the distrust score. Developmentally, LL decreased and HL increased. LH was the highest for high school students and HH was the highest for undergraduates. We propose a developmental hypothesis of trust types in adolescence: LL develops to LH, then to HH, and lastly to HL.
Key words: traits and types of trust, development, adolescence.

問　題

現在，学校教育現場においては，登校拒否，いじめ，非行などの問題が多発している．その理由の一つとして指摘されるのが，児童・生徒の人間不信である(神保，1989)．教育現場における信頼感の不足は，これまで教師と生徒という限定された関係の中から，主に教育を阻害する要因として考察されてきた(e.g.　原，1987)．しかし今日の状況を鑑みると，信頼や不信の対象は必ずしも教師だけではなく，友人や家族等をも含む他者一般，そしてときには自分自身であると考えられる．

Erikson (1959)によると，乳幼児期に人生で最初の発達課題として獲得が期待される基本的信頼(basic trust)は，青年期においてはより時間展望性を持ち自らの人生を統合するものとなるとされる．つまり，基本的信頼をもととした信頼感は，発達漸成的に，生涯に渡っての課題となると考えられる．また，程度の高い不信は敵意を伴う苦悩と関連が深く，対人問題を感じやすいこと(Gurtman, 1992)や，人に対する信頼感と自分に対しての信頼感とは密接に結びつき，個人の自我同一性の獲得に影響を及ぼすこと(天貝，1995a)が示されている．

このように，「自分あるいは他人に対して抱く信頼できるという気持ち」である信頼感は，個人の健全な発達に不可欠なものであると考えられるが，では信頼感自体は発達的にどのような変容を示すのだろうか．本研究では，信頼感の3側面の発達的変容を，青年期に焦点をしぼって検討する．すなわち，第一に，信頼感の特性(自分への信頼，他人への信頼，不信)の量的変化を検討し，第二に，それら各々の特性の組み合わせから信頼感の質的分類を可能にする類型を作成しその変化を検討する．以上により，信頼感の発達的変容に関する仮説をたてることが本

研究の目的である.

目　的

青年期(中学生～大学院生)において，信頼感が発達的にどのような変容を示すかを，信頼感の特性および類型の観点から検討する.

方　法

被調査者　中学1年生112名，2年生266名，3年生91名，高校1年生108名，2年生188名，3年生158名，大学1年生306名，2年生200名，3年生17名，大学院生63名の計1509名(男子823名，女子686名).

調査時期　1995年5月(高校生および大学生の一部については，1994年9，11月収集分を含む).

調査内容　信頼感尺度(天貝，1995a)：24項目．6件法.

結　果

(1) 学校段階における自分への信頼・他人への信頼・不信得点の比較

まず，信頼感3下位尺度得点について，学校段階および性を2要因とする分散分析を行った(Table 1)．その結果，自分への信頼では学校段階差($F(3, 1481)=10.10$, $p<.01$)が，他人への信頼では学校段階差($F(3, 1471)=16.62$, $p<.01$)および性差($F(1, 1471)=11.80$, $p<.01$)が，不信では学校段階差($F(3, 1473)=19.38$, $p<.01$)がみられた．他人への信頼でみられた性差は，女子の方が男子に比べ高い結果であった．次に，各々の学校段階差について，LSD法による多重比較を行ったところ，自分への信頼および他人への信頼は，中学生・高校生と大学生・大学院生の間に有意な差がみられた．不信は，中学生・大学生・大学院生と高校生の間に有意な差がみられた．また，自分への信頼($F(3, 1481)=3.55$, $p<.05$)，不信($F(3, 1473)=4.99$, $p<.05$)で交互作用がみられた.

ここで，各学校段階における信頼感の差異をより詳細に検討するため，信頼感3下位尺度について，学校段階毎に学年および性を2要因とする分散分析を行った．その結果，学年差は，中学生においての他人への信頼($F(2, 450)=11.36$, $p<.01$)および不信($F(2, 451)=18.45$, $p<.01$)でのみみられた．LSD法による多重比較を行ったところ，他人への信頼は中学2年生と中学1・3年生の間に，不信は中学1年生と中学2・3年生の間に，それぞれ有意な差がみられた．また，性差は，中学生においての自分への信頼($F(1, 451)=10.21$, $p<.01$)および他人への信頼($F(1, 450)=5.02$, $p<.05$)，高校生においての不信($F(1, 443)=7.04$, $p<.01$)でみられた.

各学年毎の信頼感3下位尺度得点の変化を示したのが，Fig. 1である．全体的な傾向として，自分への信頼は，学年に従ってほぼ一貫した増加がみられた．他人への信頼も増加がみられたが，自分への信頼と比べて変動が大きかった．不信は，他の3下位

Table 1　男女および各学校段階における信頼感得点の平均と標準偏差

	中学生		高校生		大学生		大学院生		分散分析		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	学校段階差	性差	交互作用
自分への信頼	4.10 (.70)	3.89 (.67)	3.99 (.80)	4.07 (.74)	4.22 (.70)	4.19 (.64)	4.21 (.74)	4.35 (.60)	10.10**	n.s.	3.55*
			(中・高) < (大・院)								
他人への信頼	4.04 (.75)	4.18 (.73)	4.00 (.81)	4.17 (.64)	4.32 (.60)	4.41 (.59)	4.24 (.65)	4.38 (.69)	16.62**	11.80**	n.s.
			(中・高) < (大・院)								
不信	3.13 (.78)	3.27 (.74)	3.41 (.77)	3.64 (.77)	3.20 (.77)	3.10 (.71)	3.21 (.88)	2.95 (.67)	19.38**	n.s.	4.99**
			中 < 高 > (大・院)								
信頼感全体得点	25.61 (13.22)	24.38 (12.82)	21.84 (15.16)	21.37 (12.78)	27.76 (12.78)	29.61 (11.98)	27.11 (16.71)	31.42 (13.63)	22.35**	n.s.	n.s.
			中 < 高 > (大・院)								

多重比較により有意な差が見られた箇所について，不等号で示す。　(**$p<.01$, *$p<.05$)

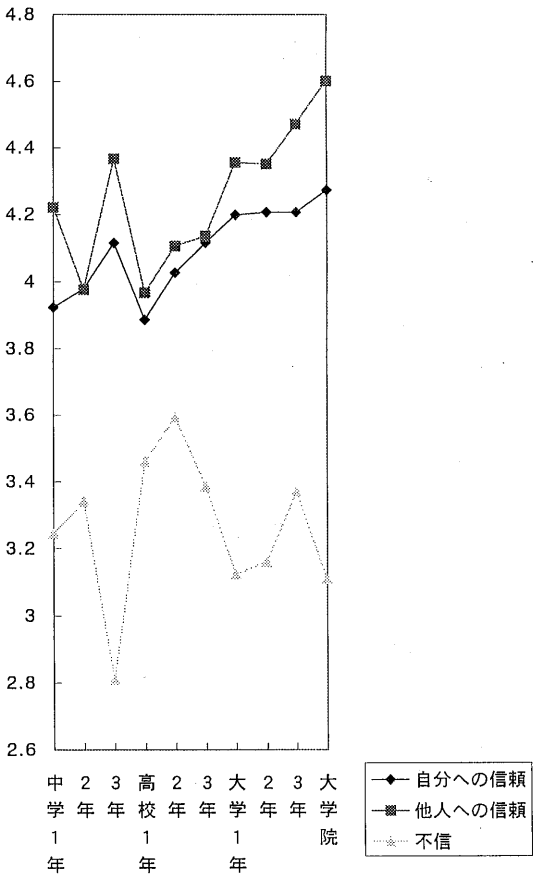

Fig. 1　自分への信頼・他人への信頼・不信得点の学年変化

尺度の中で学年に応じた変動が最も大きく，平均すると高校生において最も高い結果であった．

(2) 信頼感類型の出現頻度

まず，自分への信頼，他人への信頼，不信の信頼感3下位尺度得点はそのいずれもがほぼ正規分布を示したため，平均値(M)をもとに高群(H群)および低群(L群)に分類し，その組み合わせから8類型を作成した．すなわち，自分への信頼(M＝24.74)では25以上をH群，24以下をL群，他人への信頼(M＝33.68)では34以上をH群，33以下をL群，不信(M＝32.36)では33以上をH群，32以下をL群とし，HHH(自分への信頼：高，他人への信頼：高，不信：高．以下同)からLLLまでの8つの型に分類された(Table 2)．なお，分析に際し，類型の出現頻度は男女を込みにした学校段階別で扱った．それは，(a)男女別での出現頻度の差は，中学生(x^2＝21.51，p＜.01)，高校生(x^2＝19.07，p＜.01)，大学生(x^2＝8.69，n.s.)，大学院生(x^2=1.63，n.s.)と，学校段階が進むにつれて徐々に差が見られなくなったこと，(b)各学校段階において，サンプルの男女比がほぼ等しかったこと，による．学校段階別の類型出現頻度をFig. 2に示す．その結果，学校段階により，信頼感類型の出現頻度に分布の偏りが認められた(x^2＝103.27，p＜.01)．

Table 2　各学校段階における信頼感8類型の出現頻度(%)

	中学生	高校生	大学生	大学院生	
HHH	41(9.5)	51(11.9)	70(13.7)	4(6.7)	166(11.6)
HHL	77(17.9)	71(16.6)	147(28.8)	21(35.0)	316(22.1)
HLH	52(12.1)	54(12.6)	46(9.0)	6(10.0)	158(11.0)
HLL	28(6.5)	24(5.6)	50(9.8)	8(13.3)	110(7.7)
LHH	14(3.3)	22(5.1)	28(5.5)	2(3.3)	66(4.6)
LHL	38(8.8)	30(7.0)	53(10.4)	2(3.3)	123(8.6)
LLH	101(23.5)	127(29.7)	68(13.3)	13(21.7)	309(21.6)
LLL	79(18.4)	49(11.4)	49(9.6)	4(6.7)	181(12.7)
	430	428	511	60	1429

次に，自分への信頼と他人への信頼の和をもって信頼得点とし，信頼得点・不信得点の高低の組み合わせから4類型を作成した．すなわち，信頼(M=58.42)では59以上をH群，58以下をL群，不

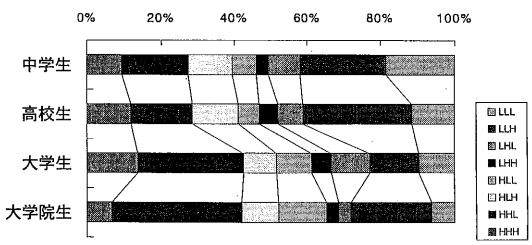

Fig. 2　信頼感8類型の出現割合の変化

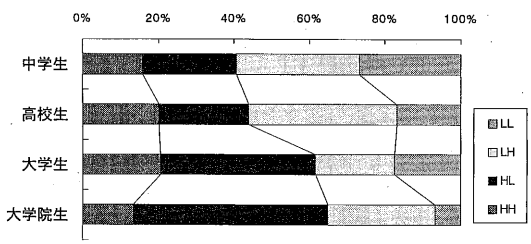

Fig. 3　信頼感4類型の出現割合の変化

信(M＝32.36)では33以上をH群，32以下をL群とし，4類型の出現頻度を求めた(Table 3)．学校段階別の類型出現頻度をFig. 3に示す．

Table 3　各学校段階における信頼感4類型の出現頻度(%)

	中学生	高校生	大学生	大学院生	
HH	68(15.8)	86(20.1)	105(20.5)	8(13.3)	267(18.7)
HL	107(24.9)	102(23.8)	210(41.1)	31(51.7)	450(31.5)
LH	140(32.6)	168(39.3)	107(20.9)	17(28.3)	432(30.2)
LL	115(26.7)	72(16.8)	89(17.4)	4(6.7)	280(19.6)
	430	428	511	60	1429

8類型に従った分類(Fig. 2)からは，次のようなことがわかる．LLLは学校段階が進むに従って一貫して減少を示した．LLHは，中学生，高校生と増加し，大学生では減少した(大学院生では若干増加している)．HHHは中学生から大学生までは一貫して増加したが，その後大学院生で減少した．HHLは，中学生と高校生の間では変化がみられなかったが，その後，増加を示した．これらの変化は，4類型(Fig. 3)での，LL，LH，HH，HLのそれぞれの変化とほぼ対応していた．なお，8類型のHLHの出現は，各学校段階において，ほぼ同じ割合であった．また，LHHの出現はどの学校段階においても6%未満と，相対的にかなり低い割合であった．HLLおよびLHLも，全体の平均出現頻度が10%未満であった．

考　察

(1) 特性的観点からみた信頼感の発達的変容

Fig. 1に示されるように，自分への信頼は，高1で一度減少がみられるもののほぼ一貫した増加を示しており，男女差もみられなかった．このことは，現在および未来の自分を信頼できるという気持ちは，青年期において，徐々に増加することを示していると考えられる．また，他人への信頼も徐々に増加がみられた．しかし，その様相は変動的であった．これは，他人への信頼が，実際その時点で当人が対人関係において体験(していること)を反映して変動し，青年期全体でみると増加していくことを示していると思われる．一方，不信は，学校段階別にみると高校生において最も高い結果であったが，学年毎の変化が著しく，青年期全体を通しての一貫した変化はみられなかった．今回の結果から，信頼は年齢が上がるにつれ増加する様相を示したのに対し，不信は，一貫した増減がみられなかった．今後の検討が必要であるが，青年期において，不信はその量があまり変化しないことも考えられる．

(2) 類型的観点からみた信頼感の発達的変容

今回作成した信頼感の類型は，信頼感の各特性の高低を組み合わせることにより，信頼感の質的分類を目的としたものである．分類の基準として，4つの学校段階の平均得点を更に平均した得点を用いたところ，各学校段階において類型の出現割合は異なっていた．これは，それぞれの学校段階において生徒がもつ信頼感の特徴が異なることを意味すると考えられる．学校段階毎の類型頻度の推移がそのまま信頼感類型の発達的変容を示すということにはならないが，ここから信頼感の発達的変容の仮説を導き，それを検討することは，重要な視点を提供すると考えられる．

今回，信頼感の類型は，3下位尺度得点それぞれの高低の組み合わせによる8つの型，および自分への信頼と他人への信頼を共に「信頼」として一つにまとめた信頼と不信の高低の組み合わせによる4つの型の，2つを作成した．その結果，特徴的変化を示す4地位(LLL，LLH，HHH，HHL)が明らかになり，それは4類型でのLL，LH，HH，HLとほぼ対応していた．そこで，考察はこれらの4類型を中心に行うことにする．

Fig. 3をみると，4類型それぞれの頻度は中学生ではほぼ等分であったが，高校生ではLH群が多くなり，大学生ではHL群が最も大きな割合を占めるようになった．さらに，HL群が類型の大半を占めるという傾向は，大学院生でさらに著しくなった．この結果から，今回調査の対象とした青年期において，LL群から，LH群，そしてHL群へという流れを仮定することができよう．一方，HH群の占める割合は，中学生から大学生まで高まりをみせ，大学院生において低くなった．ここで，年齢の増加と信頼感の成熟とを同一線上でとらえるならば，信頼感はLL(信頼も不信も感じない状態)から，LH(信頼よりも不信を感じる状態)，HH(信頼も不信も同じように感じる状態)，そしてHL(不信よりも信頼を感じる状態)へと変化することが考えられる．

この結果は，HH群が最も高次に位置する成熟した信頼の時期であるととらえた先行研究(天貝，1995b)と異なった．その理由として，先行研究では分類した際の基準得点が，高校生のみの平均値をもとにしている(信頼：H群58以上，L群57以下；不信：H群34以上，L群33以下)こと，及び高校生

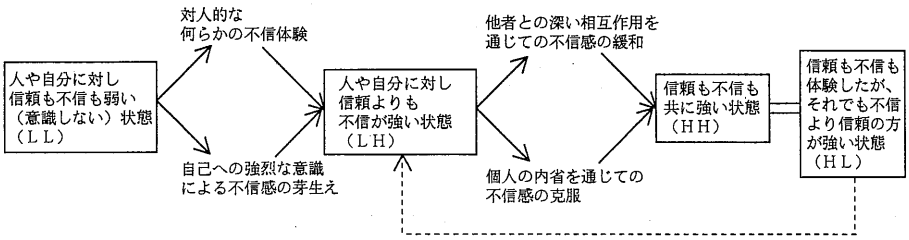

Fig. 4　信頼感類型の発達仮説モデル(試案)

に限定しての自由記述の分類であったことがあげられよう．結論として，青年期全体の視点からとらえると，HH群は信頼感が成熟へ向かう際の通過点としての段階と位置づけられ，不信の体験とその克服を前提とした場合，HL群の方がより信頼感の成熟の段階に近いととらえられる．

今回の結果により，信頼感類型の発達的変容に関し次のような修正仮説(Fig. 4)を提出する．このモデルの妥当性については，今後の検討が必要である．

まとめと今後の課題

今回の調査の結果，信頼感の特性である自分への信頼，他人への信頼，不信は，中学生から大学院生に至る学校段階毎に，量的な差異がみられた．また，信頼感の類型を学校段階毎に検討した結果から，HH群(信頼も不信も共に強い状態)というよりもむしろ不信体験を経た後のHL群(信頼の方が不信を上回る状態)が最終段階(成熟体)に近い可能性が考察された．そして，新たな仮説として，不信体験からその克服を含む一連の信頼感類型の発達的変容仮説(LL→LH→HH[/]→HL)がたてられた．

今後は，信頼感の変容の発端となると考えられる不信感の芽生えについて，そして，対人的不信感の克服が具体的にどのようになされるかについても明らかにしていく必要がある．また，今回取り上げた青年期だけでなく，生涯発達的観点から信頼感の変容を解明することが望まれよう．

要　約

本研究は，信頼感の特性と類型という2つの観点に立ち，中学生から大学院生に渡る信頼感の変容を検討したものである．「自分への信頼」「他人への信頼」「不信」の3次元からなる信頼感尺度が，1,509名に施された．結果は以下の通りである：(a)学校段階と性を2要因とする分散分析では，信頼感の全ての次元において学校段階に主効果がみられた．「自分への信頼」および「他人への信頼」は中学生・高校生に比べ大学生・大学院生が有意に高く，「不信」は高校生が最も高いことが示された．(b)信頼得点(「自分への信頼」と「他人への信頼」の和)および不信得点の高低の組み合わせによる信頼感の4類型が，カイ二乗検定によって検討された．発達的に，LLは減少し，HLは増加した．LHは高校生段階で最も多く，HHは大学生段階で最も多かった．ここから，LLからLHへ，そして最終的にHH，HLへという，青年期における信頼感の類型的発達(変容)に関する仮説が提出された．

引　用　文　献

天貝由美子　1995a　高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究(印刷中)

天貝由美子　1995b　信頼感の類型とその発達的変容－高校生を中心に－　日本教育心理学会第37回総会発表論文集，493.

Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cicle (selected papers of E.H. Erikson).* Int. Univ. Press, New York (小此木啓吾編訳　1973　自我同一性　誠信書房)

Gurtman, M.B. 1992 Trust, distrust, and interpersonal problems: a circumplex analysis. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 989-1002.

原　弘巳　1987　現代教育における「信頼」の意義－M.ブーバーを中心に－　教育哲学研究，**56**, 29-41.

神保信一　1989　信頼の心理学　児童心理，**43**, 493-503.

付　記

調査にご協力いただきました中学校・高等学校・大学の先生方ならびに生徒の皆さんに，心からお礼申し上げます．

―1995. 9 .30受稿―